

## 明治期の来日外国人の日本観（二）

— オールコックの場合 (1) —

針 生 清 人

これまでに、日本が国際社会に真に、しかも喜んで迎え入れられたことがあったであろうか。あるいは、我々が考え求めているほどに国際社会の一員として評価されているであろうか。さらにいえば、我々は国際社会の一員として何を、どれほどになしていると自負し得るところがあるであろうか。確かに、今日の日本は「経済」大国として世界各国からその経済援助等々に期待されるところ大であり、それを果していることは事実である。しかしこの事實は必ずしも認識されず、時には無視されて「経済」摩擦を大きくしている。経済、貿易収支の側面での「大国」ぶりのみが喧

伝されて、文化的、政治的な側面での未熟さが指摘されている。「経済」大国の呼称の底には何らかの非難、揶揄があるようである。約束を守らない、アンフェアである、国際協調を無視して独善的である、本音をいわない、傲慢である等々のことがいわれている。これらのことは確かに思いあたることでもあり、経済摩擦等を通して露呈してきたことでもあるが、ここに

明治期の来日外国人の日本観（二）

いわれたことは経済「大国」になったがゆえに形成された国民性ではないから、日本の経済的繁栄にのみ向けられた言葉ではなく、それ以上に、日本の国民性そのものに向けられた言葉であると思われる。いうならば、経済問題を通してではあるにせよ、日本および日本人についての世界の理解、認識を示めしているといえる。そこに誤解があるならば正さねばならぬし、正鵠を射ているならば改めねばならぬが、日本人はまたこの種のことは得手ではない。交流下手とも称されるところである。

しかし何れにせよ、日本の経済的發展が世紀的な奇蹟であるとするところから、日本経済の特殊性を知り、あるいはそれをを行なった日本人を理解しようとすることが多い。

日本の経済的發展とともに日本、日本人に興味をいだき、ビジネスや英語教師の職を介して日本人と接触を多くし、日本人男性と結婚して日本人を一層深く観察し理解しようとした一英国女性の記録がある。キャスリーン・マクロン『イギリス人の日本人観』<sup>(1)</sup>である。学生時代のマクロンにとって、日本人は賢く、不可解で、西洋人とはまったく違った人種で、ど

一

ちらかといえは第二次大戦の「残酷な看守」のイメージから恐怖感を感じさせるものであった。外から見る日本人の行動や反応は一見とても変わって見えるが、日本人をよく知ってみると、すべて納得のいくことばかりであり、そのうち日本人が違った人種であることすら忘れてしまう、という。そのようにいうマクロンにとっても、日本人が奇異にうつるところがある。その主なものを挙げると次の如きものがある。

西洋社会に比して男女の世界が明確に分離し、そのつき合いにも厳しい規律がある。男女がいつも別々である。日本人を見分ける基準はその服装であるが、男はだいたいビジネスマンと思われるいでたちで群れを作っており、飛び抜けた礼儀の良さと物静かな立ち居振舞いが際立っている。小さくてかわいくて、完全に従順でただひたすら男性に仕えるように訓練された女性を結婚相手に求める。日本女性はきれいで高価そうな衣装をまとい、同じようにきれいに着かざった子供を連れている。女性は女性としての枠内でいかなる場合も「女性らしく」あるように形成されるようだ。女の子は幼女のころからすでに本人の意向に無関係に「女の子らしく」着飾り、男女は振舞いから衣装まで完全に分けて育てられる。女の子は女性言葉で話さねばならず、最終的に「女性的振舞い」を完全に身につけた女性に作られていく。女性独特の目を伏せて、手で口を覆い、静かにさえずるような声で話し、男性が話し始めればすぐに話しをやめて譲る(テレビのアナウンサーの場合も同じだ)。夫と子供のいない女性は本当の女ではなく存在の意義すら薄く見える。逆にいうと、どんな夫でもないよりはましというこのようだ。

日本人は間違いなく子供好きだ。子供に対する溺愛ぶりはイタリヤ人、

フランス人に似ている。夫婦を中心にしてその他の関係がある西洋社会に對して、日本では子供を作り育てるために家族が存在するかのようである。

日本人の間で延々と続くお辞儀。永遠に続くと思われるが、どちらが先にやめるかについてのルールはあるのだろうか。英国人が日本人の真似をするときは必ずこのお辞儀をすることになっている。ある種の日本人は自分たちの行動の規範がはずされると幸せに感じ、ある種の日本人は反対に不安と孤独を感じるようだ(英国人も同じ)。

ビジネスマンは冷たく無表情で、硬直的で話しかけにくく、話すときもにこりともせず、どちらかというとも無礼と言ってもよい態度に感じられた。このような硬直的な態度は西洋人の女性と一緒にいるときの照れかくし、教えられるという受身の立場、外国語で話そうと悪戦苦闘している弱い立場にあるため。部下に対する上司の公私にわたる圧倒的な優越が日本企業の特徴。反対に部下の上司に対する圧倒的服従は西洋人には臆病者のへつらいにさえ見える。会社が個人の生活までも律している。少ずかな報酬しか求めず、自らのグループ、社会そして国の利益のために献身するよ

うに、これほどうまく訓練された国民がかつて存在したであろうか(ジャパン・マネーは全く生活環境改善に使われていない)。

日本人たちはみんな内部に秘めた民族としての優秀さに対する固い信念のようなものを強烈に放っている。日本人にとって日本という国は完璧な国である。日本人の国粹的優越感はさらに徹底したものであるが、日本人の親しさ、鷹揚さ、礼儀正しさ、情熱、勤勉そして献身的態度は私にとつて非常に新鮮な魅力であり、それは日本人の冷淡で横柄で排他的な印象を

バランスして余りあるものである。このような横柄な印象は自分たちの不安感と自信の欠除から来ている。

グループで考え、団結して行動することが日本人の独特な習性、行動様式と社会システムの主要な基盤である。ゆりかごのときから学び、強化されていく、日本人の行動のすべてを支配する団結の絆は訓練された思慮とでもいへべきものである。外見的にユニークで、恐ろしく自分たち流のやり方で行動する日本人もその訓練された行動様式の表皮の下には、世界中の誰もがもっている人間の顔をもっているが、その素顔に接するのは困難である。

独特の伝統・習慣・しきたりなどの不文律が実質的に厳然として世間を支配し、女性の地位を低くしている。また、戸籍抄本等の書類が何かにつけて求められ、片親、離婚家庭の子、非嫡出子などが徹底的に排除される仕組ができており、恐ろしいまでの管理社会である。何よりも日本人の画一性が驚きである。日本人は自分たちを意識的に良くも悪くも違った人種に見せたがっているようである。日本の独善性と世界の声に対する無神経さがある。日本人には確かに審美眼があるが、醜悪なものを醜悪と感ずる目はもち合わせていないようだ。日本人は温かく、情緒的で、計算はしっかりやっているが、決してモダンとはいいたくない。

日本人はそれぞれに非常に個性的で、好奇心が強く、素早く反応し、豊富な知識をもち、非常にフレンドリーである。教育レベルも高く記録熱心で、一瞬たりともおそろかにせず写真撮影を繰り返す。哲学的な沈思黙考型のくそまじめスタイルである。日本人はどんな場合にも失敗すること、つまり面目を失うことを極端に嫌う。

日本人は西洋人と舶来品を大げさにありがたがり、ときにはそれはこびへつらいのようにさえ見える。ヨーロッパ人にすっかり心酔してしまっていて、ヨーロッパ人に接するとまるで犬のようになってしまふ習性が身についている。議論を譲歩せず上から見下ろして意見を繰り返す主張するヨーロッパ人に対しては弱い。国内ではたとえようもなく幸せなのに海外に出ていくと「陸に上った魚」になってしまう。海外にいる日本人の姿から自国にいるときの日本人の本当の姿を推測することは不可能である。日本人は西洋社会から好かれ愛されたいと願っているらしい。日本人は熱心な生徒ではあるが、ある意味では子供のようにほとんど批判的精神をもっていない。しかし会うほどに味が出てくるのが日本人のキャラクターの良いとこである、奥の深さなのかもしれない。

以上に示されたことは、日本人の集団主義的画一性がその行動規範となって社会の様々な場所人間関係を律しており、それは西洋人にとって奇妙な上下関係、男女関係をも形づくっている。その関係が公的私的な生活にわたって独特の生活の形式となり、それを端的に示すものを挨拶の仕方に見ている。そして自国こそが最善完璧とする素朴なナシヨナリズムは無批判、盲目的に受け入れられ、例えそれは独善的であるにしても、自己の利益よりも企業、国家の利益を優先させる姿勢こそが日本経済発展の原動力である。そしてそれを支えるのは徹底的に国民を抑えこみ管理する社会構造である。このような社会とその伝統習慣は強大なものと弱小なものに対する態度の異なりとなる。それは西洋人に対する盲目的な心酔、コンプレックスであり、東洋人に対するいわれなき差別となる。しかもそれは無自覚であり自然であるとするところからより深刻である。<sup>②</sup>

マクロンの述べる日本および日本人論は世界を股にかけて活躍するビジネスマンの姿を通しての発言であって、本人もいう如く「訓練された行動様式の表皮」に関するものである。その表皮の下に日本人の素顔を見ようとはするが、その表皮の下にある道徳・宗教等の精神生活の側面の観察、分析はない。それは経済繁栄を生み出す上での生活および行動様式の差異、特徴にのみ関心があり、異文化としての日本文化の理解には関心が及ばぬためと思われる。これに対して、幕末開国以来の数多く残こされている日本および日本人論も、確かに西洋人には奇妙と思われる日本人の行動、好み、習慣等の観察を記録してはいるが、それ以上に、彼らに奇妙と思われる日本人の行動等を生み出すもの一切を探究しようとする姿勢がある。その何れもが、彼らの来日の目的、資格等によって関心の範囲、程度に異なりがあるにしても、必ず日本の歴史、社会体制、宗教、道徳、芸術、昔話等を探究して、日本人の価値観を明らかにしようとしている。それは異文化日本の全体的理解を旨とするものであり、そのかぎりでは単なる旅行記を超えて、すぐれた日本人論、日本文化論になっているところである。例えば、開国前後の国際関係、日本の置かれている状況、その後の西洋文物、制度の圧倒的な流入等の分析は、日本人の西洋崇拜、コンプレックスの必然を説明するものとなっている。

## 二

日本および日本人に関する記録はかなり古くからあったにしても、当然、開国前後から増加し、世界に隠さされていた鎖国日本の状況を新鮮な驚きの目で以って見、その記述もかなり公正である。来日の目的も様々で

あるが、外交官は外交官の目で、医者は医者の目で、日本と日本人を観察し、その記録は観察者自身の関心に応じて多様である。また、来日の時期、目的の異なりに応じて、彼らが接触した日本人の層も異なっているが、彼らは一般に好奇心も旺盛な旅行者として、日本と日本人の一般像を描き出そうとしている。

日本開国の国際的背景には、欧米先進諸国の極東政策の展開があった。ペリー来航(一八五三、嘉永六年)に先立って外国船の出没がしきりであって、露使ラクスマンが根室に来航して通商を求めて(一七九二、寛政四年)以来、露・英・米・仏・デンマークの各艦船が交易、薪水を求め、あるいは漂流者を送り測量を行なうことがあった。特に露の領土への関心は警戒され、幕府は「外国船漂流の際の取り扱い」を諸藩に令し(一七九五、寛政九年)、「漂流外国船は上陸を許さず薪水を給し帰国せしむべきこと」(一八〇六、文化三年)、「外国船は近付き次第すべてこれを打払うべきこと」(「異国船打払令」一八二五、文政八年)、またこれを改めて「薪水食糧を給すること」(「異国船掃攘停止令」(一八四二、天保十三年)、「異国船打払令復古の可否を有司に諮る」(一八四九、嘉永二年) ことなどがあった。これらは海防論として示めされるもので、外国船出没の頻度に応じてその内容に強弱の差があるが、あくまでも鎖国政策の固守が原則であって、欧米諸国の極東政策の動向の分析の結果としての対外認識の推移ではなかった。しかし、アヘン戦争(一八四〇、天保十一、十三年)を通して列強の軍事力の強大と市場開放への圧力を知り、外圧回避のための妥協模索となったことであり、他方で、オランダよりの鎖国の永続の困難が指摘され開国の勧告(一八四四、弘化元年)もあったところである。

この激動期の日本にあって、総領事のちに初代駐日公使として英国の対日政策の実施にあたったR・オールコック（一八〇九—一八九七年）は英国公使館（東禅寺）襲撃事件を体験しながら、開国にともなうて様々なトラブルが発生する必然性を認めている。それは開国が西洋文明と封建制度の対峙、開国を迫るものと迫られるものとの間に、「力」をめぐる相互不信が強くなること、そして何よりも日本国内における鎖国（海防）論が少なくなるとも二つあり、しかもそれらの立場の根底には対外的危機感が強くあることを指摘している。

オールコックによると、「一方では当時の無防備な状態のままでも、思い切っていっさいの申し入れを是が非でも拒絶した方がよいとした。またこれよりも有力な反対派は、このような押しつけられた条約はうけいれておいて、実質的にこれを実行しないか、早急な断絶を避けるのに必要な最低限度だけ条約を実施する。そしてその間にときをかせいで、海岸の防備を固め、抵抗の準備をすることをねらうべきだと主張した<sup>4)</sup>と、当時の日本の状況が把握される。そしてそのような議論を展開した「日本の支配階級は、主として国内の弱気ないし臆病な党派の言動によってひろめられた危機説に譲歩しただけであって、外国人にたいしてはいぜんとして敵意をいだいていた。かれらは、……諸外国はいずれも、提案した条約が拒否されるならば、戦争を仕かける用意をととのえている、と信じていたらしい<sup>5)</sup>」として、開国をめぐる議論の根底には対外的危機感が共通していることを認めている。しかし、オールコックは、条約を受けいれてもその実施に時をかせぐ日本側のやり方については、「約束を守らぬ、嘘をつく」と終始非難して、それを日本人の一般的性格としている。

オールコックが捉えた当時の状況について、確かに一部の識者によって鎖国制度の撤廃、海外貿易の推進による国力の充実が唱えられたが、その根底にはなお攘夷論があり、鎖国主義の変形であった<sup>6)</sup>。また、列強の極東政策を察知して開国により列強との競争を通じて富国強兵を計るという国策論もあつた<sup>7)</sup>。このような形での開国論は後に見られるような開国によって国内諸制度を改革し、近代化を計るという視点は全く欠除しており、「表に商船を申立、内実は専ら海軍の訓練を心得、追々船数も増て習熟し、日本人自在に大洋を乗廻し、……他日海軍之全備をなし置き、又是迄恐嚇欺罔之優を看破し」（井伊直弼）、軍備を整えれば「閭閻の禍心を致包蔵候国々も自然と奉攝長、御抗拒を待たず跡を絶ち可申」（佐久間象山）、「今日人心之不和器械之不備を以て及戦争候へば百敗必然之勢」（横井小楠）というのが、各々の理由である。その根底には対外的危機意識が濃厚にあり、それを避けるための妥協としての開港であり、開港後もその対外策の基本は変ることなく、尊王攘夷の思想とさほどのへだたりがある訳けではなかった。したがって、外国人は「紛争・不和・災厄と同一視」（『大君の都』下八五頁）されて、開港後もしばしば外人襲撃事件が起つたところである。「和親」をうたつた開国も、強大な軍事力を背景にした強要であり、強要と自覚しながらも受け入れねばならぬということは、当時の日本人にとっては面目を失ふことであり、屈辱であつた。従つて外人襲撃事件は単に外国勢力に対する危機感、強要を憎んでの行動というだけでなく、強大な列強の軍事力に対抗し得ぬところからくる無力感、挫折感を伴つたことである。しかしその内実がどうであれ、外人襲撃という行動はさらに列強の警戒と強圧をひき起こし、相互不信は拡大していったのである。

当時来日した外国人は、つねに肩ひじを怒らし刀の柄に手をかけ外人を睨めつける「浪人」の恐怖について記している。オールコックも例外ではない。首都にあっても身の安全については、日本政府も日本の護衛も信頼できぬとしている。

オールコックにとつて、外人を襲撃する浪人は「武器としては刀しかもっていないが、その数はどれほど多数か見当もつかず」、問題ではあるが、それ以上に、浪人が「強力な庇護のもとにあった」(『大君の都』下六三頁)と思われたところに問題を感じていた。「この国の政府は、条約締結の代表を暴行や殺害から守るといふ点について、かれらの無力をこれ見よがしに示したし、その重大な責務にかんじて自分たちの責任をうまくのがれていた」(同四五頁)と見るとき、オールコックには、このような「浪人」の攻撃的な行動、外国人に対する反感、憎悪も問題ではあるが、それ以上に、そのような行動に駆りたてるような歴史的背景、政治体制、封建制度そのものが問題である。

開国Ⅱ条約締結が強制の結果であるかぎりそれに反対する行動が存することは当然であり、そのような行動が存するかぎり、その履行を求めるための実力行使もまた当然であるというのが、オールコックの立場である。すなわち、「日本人は、西洋諸国と条約を締結するさいに、西洋諸国を信用せず、いまでもいぜんとして信用していないようだ。それゆえに、かれらがかれらなりに条約を締結した瞬間から、偶然に攻撃されるかも知れないという脅威を感じつづけてきたということは、当然だ」(同前書、上一九五頁)。しかもその条約締結も強制されたものである。「条約がそもそもかれらじしんの自由意志と願望の結果ではなくて、より強い力にたいする恐怖

から生まれたものであるかぎりには、この条約をまもることはひとつの強制以外のなにものでもありえない。たとえ心理的圧迫ということをどんな美辞麗句でおおいかくすとしてもだ」(同前書、中四〇九頁)と、正しくその事情を認めてはいる。しかし、条約締結以前はどうであれ、締結以後は平和裡に事を運ぼうとしているのに、それを防げる行動があるならばそれを實力によって排除しても許るされるではないかという自己弁明と、力を背景にした自己正当化が述べられるのである。「大英帝国は、かれらに政治的、通商的關係を押しつけてからあとは、多少の例外はあるかも知れないが、原則的には条約を実施させるために強制的手段に訴えることにきわめて消極的」(同前書、下四〇九頁)であったが、「他のすべての手段をもつてしても条約の規定を忠実に履行させることができないなら、強圧的手段に訴える意志があり、そうすることもできるという事を知らさなければならぬ」(同前書、下二九二頁)という「砲艦外交」に依拠しているところである。

### 三

開国期の日本の状況は、外国人にとってきわめて「疑惑にみちたふんいき」であつて、「生命の安全は保証されず、貿易は日々制限を加えられてきており、外交的手腕の範囲の決議や反対は、これまでのところ当局を動かして政策を変えさせるのに役立たなかつた。その政策のもっとも明らかな傾向は条約を死文化し、いっさいの接触を制限し、そして結局は外国人を追い出して、以前の孤立の状態に復帰しようということ」(同書、下六五頁)が本質的であつた。この本質的な鎖国主義が開国に至つたのは、「た

かう準備がととのっていないことに気づいたがゆえに、交渉し、取引きを行なった。かれらは微笑し、そらとぼけて、なんとかして譲歩しまいとしてできるかぎりの努力をした」(同書、上三六頁)というのが、オールコックの日本認識であるが、彼はこの表面的には微笑し、その反対のことをなすということをし、とぼける、嘘をつくことと捉えて、直ちにそれが日本人の性格だと一般化するのであって、軍事的な強大さに直面しての「弱さ」のなさしめたことだの理解は全くない。しかも、そのような対応の仕方が日本人の一般的性格だとするとき、そのような性格の形成も、外国人に対する激しい反感、敵意のあらわれも、日本に特殊な島国という地理的自然環境と歴史にその原因が求められている。

日本の特殊性、あるいは日本人の一般的性格を日本の地理的環境等によって説明しようとするやり方は現在でも変わらない。英国人との類似性を通して、「島国の国民、長い歴史と長く続く君主の系譜をもつ。伝統と誇りが共通の特徴、地理的に似ている。国を縦に走る背骨に当る山脈、変化に富んだ天候と嵐に刻まれた海岸線は国民を挑戦に立ち向かう勇氣ある適応性に富んだタフでスティックな人種を作りあげた」<sup>(8)</sup>ともいわれる。オールコックも日本人の性格形成を島国に起因させてはいるが、島国であることは日英両国人を決定的に特徴づけるものではないから、日本の歴史に着目するのである。日本は「島国であって世界の他の地方から長いあいだ孤立していたことのために、日本人の性格の中には狂信的な愛国心がつちかわれている」(同前書、下二〇二頁)というのである。この「狂信的な愛国心」は支配階級によって注意深く蓄積されたもので、「憎悪と恐怖の混り合った感情、宗教的・政治的狂信の感情」に他ならないという。このよう

な感情が根底にあるかぎり、外国人に対しては言語、習慣の相違の自覚の他に民族的反感が示されるのであって、それを育成するのが封建制度だという。

封建制度は「その伝統と国民性において強く、その半ば騎士道的な武断的性格において挑戦的」(同前書、下二五八頁)であり、これが西洋文明と対峙し、外交上の障害となっているというのである。すなわち、「条約と近代戦の武器を背景に有するヨーロッパ外交と日本外交との闘争」が開国に他ならないが、「日本の外交は、国家主義的狂信といっさいの革新への敵意によってはげまされ、暗殺者の刃および東洋的背信と残忍な冷酷という武器のすべてによって後援されていた」(同前書、上三六二頁)のである。それゆえ、「自由貿易に反対する経済学」「純粹に政治的な考慮にもとづく宗教的不寛容」が、開港後の対外通商の進展にとって障害となっているが、それ以上に、「封建制度」が障害となっているというのである。そこにはヨーロッパ人が進歩とか文明とかいうことばで理解しているものではなく、「不信の原因となり騒動の要素となる」ものばかりが存するのであって、このような状況の打開するには「力」が必要である、と結論する。すなわち、「条約を生み出したのと同じ手段を使わなければ、その条約を完全に維持することはけっしてできないであろう。したがって、いかなる状況のもとにあっても、貿易や文明や宗教を押し進めるために強制に訴えることには原則として反対している政治家や博愛家は、西洋諸国が東洋諸国と結んだ条約には加担すべきではない」(同前書、下二六九)のである。そもそも樹立された関係は強制的なものであり、しかも強制的な手段に訴えないで強制しつづけることができない以上、条約を維持し続けるには、強制的な手

段を恐れ、尊敬するようにしむけなければならぬ。すなわち、「高圧的なたいへん手取り早い措置とか、その場所や近くの水域にたえず大艦隊がいることが効果をあげた」(同前書下二〇九頁)と云うのであるから、「東洋の文化の低い国民と同じように、日本人にとっても、軍隊というものが力を示し尊敬をかちえる。その他のものではだめ」だというわけであり、「力か圧力で強要した条約は、一般に同じ手段によってのみ保たれる」というわけである。従って、列強の対日政策の基本は、「他の国々が条約の履行を強制する力をもっているのに日本政府は効果的な抵抗をするだけの手段をもち合わせていない、ということをも日本政府にこれまでよりもっと正しく理解させるために、私たちはいかなる努力も惜しまなかった」(同前書、下二〇九頁)ということに示されている。

しかし、オールコックは幕末日本の状況を不信の念をもって見てはいたが、封建制度を根底から改め新しい政治体制を形成しなければならず、しかもそれが可能であるとしていた。その立場に立って、彼はロシアの対日政策が領土拡張にあることを警戒しつつ、日本との平和的友好的な外交関係を樹立することを望んだといえる。そのために、オールコックは日本の政治状況の分析を行ったのであるが、それを補足するため彼は日本各地を旅行し、民情、風俗、農業、道路事情等を観察し、日本および日本人の一般的性格を知ろうとしたのである。しかしそのときの視点は、近代西洋との比較において日本の後進性を指摘することにあつた。「二つの文明の相対的な価値ならびに地位がどのようであらうとも、われわれの方が強力な民族である―科学や戦争のありとあらゆる手段や器具の面で強力である―」(同前書、上三八頁)という立場から、「風変わりな国民」についての

知識を収集し、東洋の性格、政策に対応する西洋の外交状態に光を投げかけようとしたのである。

そこで捉えられ一般化された日本および日本人像は、その後に記録される諸文献、資料の原形とも見なされる部分が多い。「かれらが不誠実でありながらこちらの誠実さを信じる、といったようなことは、アジア人を十分に知らない人びとには矛盾しているように思えるであろう。かれらは習慣的に嘘をつきながらも相手が一時的な利益のために策略とか虚偽に属するような人でないと知るや、こちらが正直なことを信じ、誠実さに敬意を払うようになるのがつねである」。「日本人には、小さきまじまじながらに、ごまかそうとする矯正したい性向がある」(上二一九頁)、民族の体質的特徴は道德的な特徴とともに世代から世代へと伝えられるが、日本人の場合も例外でなく、「うそをつくその性癖はなにか最初の体質が完全に身についてしまったに相違ない。それでもなおその上に、日本人はその性質のなかになにか上品で善良なものの痕跡を多くとどめている」、社会の連帯というようなことは「まったく知られていない」(中、一七七頁)、「両親は、すべてとまではいわぬが、あるばあいには、自分の子供を売る権利を有していることがある。賭博は常習のことであるから、……男はしばしば妻や子供や、自分じしんさえも賭けることがあることはほとんど疑う余地がない」(下二二五頁)。以上のような、日本人の道德上の欠点が先ず指摘される。

さらにヨーロッパ人を驚かしたものとして次のようなことが挙げられる。「約三〇〇〇万の国民が、飢えと欠乏をほとんど知らぬ」(上二二七頁)、「法と正義を一様に行なうこと、衣服の絶対的な一様性、外国との戦

争や内乱が全然ないこと、歩兵や所得税がないこと、貧者には食料が最上の贈り物であって、いつも満腹しているということ」(上一二八頁)である。

「日本の法律の厳しさはひじょうなものであって、その法典はおそらく世界でもっとも残忍なものであろう。というわけは、大半の犯罪の刑罰が死刑であるからだ」(上一三一頁)、「日本の法律や習慣からすれば人命はあまり重んじられていない」(上三三六頁)、「国民の満足そうな性格と簡素な習慣の面でひじょうに幸福でありつつ、成文化されない法律と無責任な支配者によって奇妙に統治されている」。日本人は成文法というものを「いちどもその写しを手にしたことがない」、「印刷されたこともない」、「成文法、法律ないし法律家のない国でひじょうに進歩した文明をもっているのは異常であるように思われる」(中一六五頁) ことなどが挙げられている。オールコックは、日本のある程度の豊かさ、法の厳しさ、不文律の支配の原因は、日本の鎖国と封建制度にあるとしてその再評価すら試みるどころである。「公開の弁論も控訴も情状酌量すらもみとめないで、盗みにたいしても殺人にたいするのと同じように確実に人の首をはねてしまうような荒っぽくてきびしい司法行政を有するこれらの領域の専制的な寡頭政治組織の原因と結果との関連性がどうであろうとも、他方では、この火山の多い国士からエデンの園をつくり出し、他の世界との交わりをいっさい断ち切ったまま、独力の国内産業によって三千万と推定される住民が着々と物質的繁栄を増進させてきている。とすれば、このような結果が可能であるところの住民をあるいはかれらがしている制度を、全面的に非難するようなことはおよそ不可能である」(中二〇九頁) といひ、そのように鎖国、封建制度の再検討をするのは「自然に抱く感想」だとしている。

#### 四

初めて日本を訪れた者は、日本が全く西洋と異質であり、本質的に逆説と変則の国だと云いがちである。オールコックにとっても、日本では、「すべてのことが、日常茶飯事すらが新しい面をもっており、奇妙に逆転される。……ある神秘的な法則によってまったく正反対の方向と逆転された秩序に駆りたてられているように見えないものはない」。例えば、上から下へ、右から左へと縦文字をかく。書物は西洋の書物が終るところから始まっている。鍵は左から右へ回してかけるように作られている。老人が尻あげをし、子供たちがそれを眺めている。鉋は自分の手元へ引いて使う。馬小屋の馬の頭は入り口の方を向いている。馬具につける鈴は後部につけている。婦人は齒をまっ黒にしている。馬に乗るときに右側から乗る。仕立屋は自分の手元から縫ってゆく。「この反対の原理は、かれらのすべての道徳生活・風習・習慣のきわめて意外かつ奇妙な流儀に現われている」(中一七一頁) ときいひようがない。とすれば、日本人の行動の規範とは一体何であろうか。オールコックがいうように、地上における一切が西洋とは全く反対の原理に立つとしたならば、価値規範も全く転倒したものとかわざるを得ない。事実、オールコックは商人のかけ引き、外国人に対する掛け値をうそつきの証拠として、嘘が日本人の一般的性格であることを述べようとする。「日本人同士のあいだでは、うそをつくことが悪い習慣以上のものになっている。すなわち、かれらの統治と行政の制度の必要な機構の一部になっているとしても、驚くには当たらない」、「日本人の悪徳の第一にこのうそという悪徳をかけた。そしてそれには、必然的に不正

直な行動というものがともなう。したがって、日本の商人がどういふものであるかということ、このことから容易に想像できよう。かれらは東洋人のなかではもっとも不正直でずい。……貿易においてきわめて巧みな計画的な欺瞞の例がたえない。(下二二七頁)、「だますことの巧妙さと一般性にかけては、日本人ははるかにわれわれにまさっている」、「まっ赤なうそがばれて非難されることは、日本人や中国人にとっては、恥にも不面目にもならない。見つけられることにたいするスパルタ的な恥辱感さえないのである」(下二一九頁)という。しかし、商人が掛け値をし、かけひきをするのが日本に固有であって、そこから日本人が一般に嘘つきであるとする主張することには、英国人商人の行為の批判、反省はない。「日本に最初に身を落着けた外国人は大部分、イギリス人、アメリカ人およびオランダ人達がシナや蘭領インドで持っていた大商店の出張所員であった。それは完全に間違いない人間で、……危険な冒険家、詐欺師ではなかった」という主張と同一線上にある。欠点があるとすれば肌の色から人を傷つける虚栄心と、土着の人を見下す習慣があるにすぎないというものである。<sup>10)</sup>

事情が変わって、経済大国となった日本からの旅行者を迎えるイギリス人たちの姿を見れば、商人のかけ引きは洋の東西を問わぬということの方が適切であろう。「商店主は日本人旅行者がもたらす円に狂喜し、揉み手に余念がなく、一方で道行く人は日本人の裕福さにジェラシーを感じ、あとは無視する。タクシーは遠回りをして料金を稼ぎ、バスの運転手は釣り銭をごまかそうとする」(アンティークを買いに行く)「たちまち売り手の顔に不純な笑顔が浮かび、値段が十倍に跳ね上がる。彼が日本人だからである」<sup>11)</sup>という事情があったからとて、英国人全体がずいといえるわけ

ないのである。

また、オールコックは、日本人から政治・統計・科学の何れであれ、何らかの知識を得ることは困難であるという。その理由は一つには、日本人は自分の生活や仕事に直接関係のないことについてはきわめて無知だという。他の理由は「外国人をあざむき誤らせようとするかれらの根づよい性向のためである」(「外国人が何かを知ろうとすると」たちまちにして日本人は、一切の知識をつたえることを拒んだり、わかりきったうそでもいからうそを教えることをもって、自分たちの仕事とこころえ、あるいはそうすることを楽しみとする」(中三三八頁)ことだとしている。しかし、このような嘘言癖を日本人一般の性格とし難いからか、それを外交折衝にあたる者に限定して、庶民の純朴さを語るに至るのである。「国民の生活様式と親切的性質は、かれらの支配者のごまかしや二枚舌などよい対照をなしている」(中十七頁)、外国人(中国人、オランダ人その他)から「悪習を教えこまれながらも、愛想がよくて理的で、礼儀正しい国民であり、その上に上品で……一種の柔らかなことばを話すという結論をえることができる」(上一五一頁)と庶民の気質の良さが数えられるが、それでもなお、西洋から見ると絶対に許し難い悪徳が存する。それは男女の関係、女性の置かれる地位の問題である。娘を売るといふようなことも法的に認められ、隣人の非難もこうむらない。人身売買、合法的な蓄妾制度がある国では家庭の關係の神聖さをどうして維持できるか、「こういう国には健全な倫理観はあり得ない」(下二二七頁)といわれるが、他に例を見ぬほど、母親は息子に対して異常といえるくらいに權威を有するのを見ると、たとえ独立し尊敬されるものではないにしても、女性の地位は想像されるほどに

ひどいものではないのかと、オールコックならずともまどうところがある。

しかし、一般に、婦人たちの特徴は「おだやかな女らしいつつしみ深い表情と挙動」であり、世界中で「個人的な虚栄を完全に捨て去っているという点で、日本の女に匹敵するものはないかも知れない」(上二九二頁)

し、他の東洋諸国に比して「妻が夫に対してよりよき伴侶であり、その立場がいちだんと平等だといえる」ような位置にあるように見える。しかしその実際は「主人が妻に鄭重に給仕されながら夕食をとっている」のが通常であるように、妻は「いつも夫を主君として使え、夫を主人と見なししている」のであり、「法律や国の習慣によって社交界に出たり、家族以外の者に会ったりすることは厳禁されている」ようである。しかも夫は「一夫多妻や蓄妾制」に安住して、「腹の立つことがあると離縁状を書く」こともあり、日本男性の女性観は「高度の文明の段階にまだ達していない」(上二九五頁)といわざるを得ないが、そのような地位に忍従する日本の女性の姿は、「われわれの概念をまったく混乱させた」(上二四七頁)のであって、

日本は全くの男尊女卑の風習が行きわたった男性社会であり、男性のルーズさと女性の地位の複雑さに驚きの目を向けている。

こと女性に関しては横暴ともいえる男性に関してはどうか。身分あるものは、その態度にある種の洗練さと優雅さがうかがえるし、下層階級(町人)の人々でさえ、つねに大変礼儀正しく、他人の感情と感受性に対する思いやりをもち、他人の感情を害することを好まない。そのような気持は、世間一般が野卑で粗野な放縦が広く行なわれるところなら、とても持ち続けることのできぬものである。労働階級でさえ、「こちらの用件を聞いて

いるときには、そのしぐさと表情には、穏やかさと人の心をとらえずにはおかぬ鄭重さが現れている」(上二九八頁)のであって、日本人は生活上の礼儀を完全に理解し、身につけているといえる。このような礼儀正しさから生みだされるのは、「妙に自己を卑下する傾向であり、個人主義・自己主張がある程度欠けているということだが、これは、他面、かれらの国民性のなかのあるものにひじょうに反している」ということである。それは自分の民族や国家に対する過度ともいえる自負心、誇りであり、自分の威厳を重んずることとの関係である。それは特に、習慣やエチケットを無視、拒絶されるとき、それは自分たちに投げかけられた軽蔑、侮辱と受け止め、それに対して極めて敏感である。このことから、日本人は「儀式ばって固苦しい国民」と見なされる。又、軽蔑、侮辱に敏感であることは、逆に、他人に対してひじょうに気を使うことになる。他人に対する謙遜も回りくどく固苦しさを伴うが、その根底には自負心がひそんでいたのであり、自分自身のことになると最も自負心が強く儀礼に頑迷といえるほどにこだわる国民である(上二六四頁)。

いずれにしても、日本を表面的に概観すると、法、儀礼において厳格であり、一般的に贅沢さが欠けているが、すべての人に生活することを可能にし、各人に行動の自主性を保障している(中二七頁)と思われ、知的な教養もかなりのもので、教育はヨーロッパの大半の国よりも行きわたっている(下一四二頁)ともいえる。従って、日本人には個人的自由はなく、封建制と専制性が入りまじった法や政治は、全ての個人性、それに伴う権利を全て放棄するように要求しているという結論には賛同し難い(上二六五頁)が、「軍事的・封建的・官僚的カースト」(上二〇四頁)が存する

ことが日本の重要な欠点であると捉えられる。

オールコックは、広く日本の諸状況を観察して、日本には高度の物質文明があり、その産業技術は蒸気の力や機械に依らずに到達しうるかぎりの完成度を示している、という。無限に得られる安価な労働力と原料が、機械を補う利点となっている。これに対して、鎖国の内にある日本の知的、道徳的な業績はその三世紀にわたって西洋が達成したものと比較するとき、極めて低い位置にあるといえる。しかし、自分より秀れた文明を受け入れる能力は大きい(下二〇一頁)と、オールコックは暫定的に結論するが、その見通しの多くは今日の日本のあり方を示唆するところがあつた。また、オールコックは日本の首都に駐在した公使という立場で、日本および日本人を観察し、その職務による各開港地の視察、外交官特権を利用して、やゝ強引に、外国人として初めて富士登山を強行するなどしながら、記録を残した。それは外国人による日本観察記という意味でも重要であるが、それ以上に、日本人の手によってほとんど記録されていない当時の日本の風景、日本人言動等を知ることにおいても重要である。しかもこの記録が、少なくとも日英外交を円滑に行なうにはどうすればよいか、を常に念頭においてのものである以上、当時の英国の外交方針が奈辺にあったかを知る上でも貴重である。英国あるいは外交官オールコック個人の意図と問題は、東洋において実行される西欧外交の本質的で固有の条件は何か、西欧人の行動を支配する必然と偶然とはいかなるものか、異なる文明を融合させ新しい市場を開拓するとき成功と称してもよいような範囲とはどこまでか、ということにあった。外交官としてのオールコックの任務は、それに関する十分な情報の把握にあったが、その収集のあいま

になされた観察は、外交上の必要な情報というよりは異文化日本を伝達するという性格を強くして、秀れた日本論となつたのである。そして外交関係を永く持続するためには、日本の現状と将来の見通しを得ることが不可欠であるとして、オールコックの目は特に日本の社会・政治制度と家族関係に向けられて行くのである。そして、日本には近代化をすゝめる萌芽があるか、家庭は新しい進歩的な民族を育てあげるゆりかごでありうるかどうか、大衆の中により高度な、より進歩的な文明をきづかせるような精神的な刺激があるかどうか、を探究するのであるが、これらの指標は今日でも重要なものであるといえる。(未完)

註

- (1) 草思社一九九〇年刊(柳本正人訳)。マクロンはアイルランド人の血をひくイングランド生れ。陸軍将校の父、最初の夫と独・仏で生活したことがあり、第二次大戦時に日本軍の捕虜となつた伯父の体験談から「日本に対して漠然とした嫌悪感を抱いていた」が、独・仏両国語を話すアパー・ミドルクラス出身の国際派として「平均的英国人に比べて、人種の偏見という点では寛容かつオープン・マインドだと思ふ」ところからの、日本及び日本人論である。
- (2) 外国人登録法に定められた指紋捺捺を拒否した日韓国人に対する控訴審公判判決の一部に「外国人が国民に比べてわが国社会との密着性が乏しいことなどに照らし、合理的な根拠にもとづいた差別で、平等原則に反しない」とある(昭和六一年八月二六日朝日新聞)。法理論はさておき「合理的な根拠にもとづいた差別」の発言の背後にある、差別すらも合理化し得るとする法以前の独善性を異とせぬ国民的意識、あるいは合意が問題である。このことについてはシンガポールからの留学生林麗貞(ラム・ライチング)さんの示唆をうけた。
- (3) オールコックは日本の封建制度を「一種の封建的貴族制」、「貴族的寡頭政治のきわめて複雑にして不完全に結合された制度」と捉えている。オールコック

ク『大君の都』下(岩波文庫)一二〇頁以下参照。

(4) オールコック『大君の都』下九〇頁。

(5) 同前書上一六四頁。

(6) 井伊直弼上書(嘉永六年八月二十九日)「皇国沿海大砲を以外寇に可敵対之軍艦無之、……兵艦なくては追討之術計何分無心許奉存候……暫く兵端を開、年月を経て必勝万全を得る之術計に出可申哉」(幕末外国関係文書二)。

(7) 佐久間象山意見書「學術智巧は互に切磋して相長じ候もの故に、始終御鎖国にては御国力御伎倆共竟に外国に劣らせられ、終に御鎖国も遂げさせられざるに至り可申、……万国の長ずる筋を被為集、外国にも追々日本領をも被為開、御国力の御強盛も万国の上に出で、銃砲の御修繕弾薬の御術業も万国の上に出で、軍艦の数も万国の上に出で、将材異能の士の衆多なるも万国の上に出で、兵卒の鍊熟も万国の上に出で城制の堅固なることも万国の上に出で候様被為至候……」(藩主への意見書)文久二年十二月二十四日『象山全集二』。

また、横井小楠「方今天下之勢海航相開四海万国比隣と相成、一国鎖守す可からざるの勢に有之候、況哉、皇国四面環海之形勢に候へば、開て通ず可く鎖して守る可からず、進で征すべくして退で攘ふ可からず、是則世界之一大变革にして、皇国往日之孤立鎖守決して今日行ふ可からざるの事は不及弁論分明之道理にて有之候、然ば天地自然之勢に随ひ旧来之鎖鑰を開き、彼所長を取り富国強兵之実政被行候へば、数年を待たずして一大強国と相成候事は是又分明之勢にて有之候」(幕府宛建白書)文久三年二月、山崎正董編『横井小楠』下、遺稿編。

(8) マクロン『イギリス人の日本人観』九〇頁。

(9) 鎖国が法の施行を厳しくしたとするものに、ヴィンセスラフツォフ『ロシア艦隊幕末訪記』新人物往来社、がある。「日本が世界から隔離されたことは、……外国から影響を受ける可能性もなくなつて、習慣やものの見方に画一性と等質化の刻印が押されるにいたつた。『国民が』無条件に法を守ることをさらに徹底させる目的で、国中が系統的に組織されたスパイ網でおおわれ、反乱など思い描くことすら不可能な状態におかれた」(八五頁)。

また、ルイス『マクドナルド「日本回想記」』刀水書房、「日本の法律は」一

般的性格として、法律はきわめて厳しく、生命と財産を擁護するため、厳格に施行されている。償い(同害復讐法)の原理が彼らの間で一般におこなわれている。」「奉行は生殺与奪の権限をもっている」(二六三頁)。

(10) リンダウ『スイス領事の見た幕末日本』新人物往来社、一〇四頁。

(11) マクロン『イギリス人の日本人観』四四頁以下。